

宗派超え神のご加護を巴里の空
福岡県 桑原 正彦
安倍の世は評価されずに支持される
東京都 三井 正夫
苦勞して出してもどこへ行くのやら
大阪府 清水 康寛
☆こんなにも芸能人とお友達
神奈川県 高田 正夫
荒稼ぎその分どこかの税が減り
神奈川県 大坪 智
薄くなった頭にウツズの苦節見る
大阪府 遠藤 昭
こち虎が優勝したのは大昔
兵庫県 妻鹿 信彦

かたえくぼ

■投稿先
〒104・8661
東京・晴海郵便局
私書箱300号
朝日新聞「声」
FAX 0570・013579
03・3248・0355
メール koe@asahi.com
▼500字程度。「かたえくぼ」は愛称を。「朝日川柳」は1通に2句以内▼住所、氏名、年齢、性別、職業、電話番号(携帯も)を明記▼実名原則、二重投稿、メール投稿時のファイル添付はご遠慮ください▼趣旨は変えずに直すことがあります▼原稿は返却しません

『特定技能』
隠蔽改ざん忘却
霞が関
(長井・米助)

■無断転載を禁止します

進展へ創意尽くせ

2、第3の経済力を抱
同士の首脳往来がこれ
牽制していたのは尋常
経済や文化などの広
大を政治が妨げる過ち
してはなるまい。
は、秋にも習氏の来日
きないか働きかけてい
今年には日中韓首脳会
が中国だ。順調に開か
倍首相が訪中する。
二面国の間には、一朝
解決できない難題が多
諸島を含む東シナ海に
シナ海問題など中国の
は大きな懸案だ。
最近では、米国と中国
が高まっている。トラ
貿易面での不均衡の
に求めることも、
でも牽制を強める。
中の緊張は、今回の
も影を落とした。
固に同調するかたち
産保護などの対応を

中国に求めた。一方、中国は高
速移動通信方式「5G」で、日
本が中国の企業を排除しようと
しているとの懸念を示した。
ここには、これからの日本に
課せられた長期的な課題が垣間
見える。それは、米国との同盟
を維持すると同時に、中国との
新たな建設的な関係を生み出す
という難しい作業だ。
米中とともに、自国第一主義
のつばぜり合いを続けている。
そのほぐまに立つ日本は、法の
支配と多国間主義の尊重という
原則を忘れてはならない。
中国に対しては、持続的成長
に向けた経済の構造転換を求め
ることも、軍拡や人権問題へ
の苦言を呈すべきだ。北朝鮮問
題では、朝鮮半島の安定という
共有の利益を考え、日中が意見
交換する余地はあるだろう。
米中関係の曲折に翻弄される
のではなく、能動的な日本外交
を展開できるか問われている。

どう思いますか

歩きたいけど...

認知症の母の歩行 わがままか 2月20日 要旨
高校教員 羽田 澄子 (埼玉県 57)
ところが、施設のケアマネジャーは「歩け
るようになるかかえって危険です」。車椅子
から立ちあがり、転倒するリスクが高いとい
う。あえて車椅子のまま生活させるという
方針に、違和感を覚えた。
歩くことは筋力トレーニングにもなる。少
しでも自力歩行できるなら、母の意欲を尊重
したい。無責任なわがままだろうか。

疲れるぐらい歩かせてあげて

介護福祉士 校條 清 (埼玉県 59)
戻りました。職員同士で、歩く大切さを
実感した次第です。
ただ、施設のケアマネジャーの「歩け
るようになるかかえって危険です」もわ
かります。もし転倒すれば、今度は寝た
きりになるかもしれません。
中には人手不足もありリスクを恐れて
車椅子を使う施設もあるようですが、お
母様の場合は「どんどん歩かせて」と医
師が太鼓判を押し、職員も応援している
と思います。お母様が「歩き疲れた」とお
っしゃる日が来ることを願っています。

けが防止を優先 無理しない

主婦 山下 晴子 (大阪府 61)
るけど、車椅子なの？」と葛藤しまし
た。しかし、無理をしないという考えに
落ちつきました。これ以上けがをしてほ
しくないからです。
車椅子生活でも、母の歩きたい思いを
かなえられないか。できるだけ母を訪
ね、母の生活に付き合うようになりまし
た。親子の幸せの時間と思って、ゆっく
り二人三脚で歩く程度で良いとしていま
す。介護に正解はありません。「わがま
ま」と思わないでください。何か道はあ
ると思いますよ。

たとえ歩けなくても平穩が一番

専門学校講師 金井 絹子 (栃木県 64)
私の母も認知症です。骨折が原因で、
今は終日ベッドの上で過ごしておりま
す。施設からは「認知症だと歩けないこ
とを忘れて、急に起き上がってベッドか
ら落ちたり、足を踏み出して転んだりし
て危険なので、歩く訓練より見守りに重
点をおいています」という説明があり、
納得して見守りをお願いしています。
施設は人手が少ない中、24時間態勢で
見守りをしていていますが、私がリハ

ビリをお願いしないのは、これ以上、母
に痛い思いをさせたくないからです。不
慮の転倒は予防や予測が難しいもので
す。少しずつ歩けるようになれば、転倒
の危険は増すでしょう。
私は転倒して他の部位を骨折したり、
負傷したりする危険を冒してまで、リハ
ビリすべきだとは思えません。施設がリ
ハビリしないのも、危険回避のためだと
理解しています。たとえ歩くことがかな
わなくても、母の残された日々が平穩で
あることが一番だと思っています。

体と頭の活動性低下の方が怖い

整形外科医 福島 斉 (東京都 61)
92歳になる母は、転倒による骨折で施
設に入所中であるが、歩きたいという希
望をかなえていただいている。歩ける可
能性のある者を車椅子で生活させること
には、私もやはり違和感を覚える。
確かに、転倒すれば管理者側の責任が
問われる可能性は理解できるが、転倒は
歩行中だけでなく、ベッドへの移乗やト
イレ介助などの立ち上がりの際にも発生
する。車椅子生活になると歩行中の転倒

はなくなるかもしれないが、さらに筋力
が低下し、その他の日常生活動作で転倒
のリスクが高まる恐れがある。
実は、85歳以上の転倒では、障害物に
つまずくことよりも、筋力やバランス能
力の低下が原因であることが多いのだ。
虚弱高齢者においては、歩かずとも立
つというだけでも、筋力やバランス
能力を維持し、頭脳活動の低下も予防で
きるよい機会ととらえる。怖いのは、歩
いてしまうことではなく、全てにおい
て活動性が低下することである。

何度も話し合い調整を

いずみの杜診療所(仙台市)の社会福祉士
・田中しなのさん 介護施設で施設長をし
ていました。認知症のご本人が転んで骨折



した時、ご家族から「本人の気持ちを尊重し
て、あそまで目を配っていたのだから」と
フォローして頂いたことがありました。
私たちはご本人やご家族と何度も話し合
い、ご本人の歩きたいという意欲や、どう
過ごすかを自分で決める権利を尊重しなが
ら、できる限り環境を調整するよう心がけ
ています。転倒などの身体的リスクと同時
に、車椅子での生活を強制されることで生
じる孤立や意欲の低下など、社会心理的な
リスクも考慮しなくてはなりません。
認知症という障がい配慮を尽くしなが

ら対話や交流を重ねることで、ご本人の表
情やしぐさの意味にも気づけるようになり
ます。そうした関係性のもとに、例えば食
事やトイレに行く時に歩くなど、できるだ
け安全な暮らし方を「ご本人と一緒に決め
る」という発想が大切だと思います。